

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 濱田 昌実

論 文 題 目

地域在住女性における骨折、動脈硬化進展予防に向けた保健指導
指針の策定

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 本田 育美

名古屋大学教授 林 登志雄

名古屋大学教授 玉腰 浩司

論文審査の結果の要旨

血管石灰化は骨粗鬆症と合併することが多く、加齢の他にも両者の共通の要因が分かりつつあり、骨-血管連関として注目されている。頸動脈プラークの存在は、心血管病未発症者において、頸動脈の内膜中膜複合体肥厚よりも心血管病イベント発症の強い予測因子とされているが、**echogenic plaque** を動脈硬化のアウトカムとし、骨粗鬆症の影響を見た前向きコホート研究は見当たらない。また、骨-血管連関を視野に入れエビデンスに基づく標準化された保健指導指針や、保健指導マニュアルは存在せず、保健従事者の力量に任されている現状がある。本研究では地域在住日本女性を対象とした **Japan Population-based Osteoporosis (JPOS)** コホート研究のデータを用いて、ベースライン（1996年）の低骨密度や既存骨折が10年後の **echogenic plaque** の有無に関連するかどうかを明らかにし、さらに、2016年調査時の横断データを用いて、骨-血管連関と運動機能の関連を明らかにしたうえで、骨-血管連関を視野に入れた保健指導指針を策定した。




本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. 1996年から2006年の対象者500名から得られたデータと、同じ対象者のうち2006年から2016年の調査で得られた267名分のデータを用い、従属変数を **echogenic plaque**、共変量を年齢、予測要因を生活習慣病既往、骨粗鬆症診断、骨粗鬆症骨折既往とした一般化推定方程式を用いた多変量解析を実施した。**echogenic plaque** 発生に有意な関連が見られた変数は、高血圧、糖尿病、腰椎骨密度で診断した骨粗鬆症、骨粗鬆症骨折既往であった。
2. 2016年の調査に参加した458名の横断データを用いた解析において、骨粗鬆症性骨折既往、特に椎体骨折既往は、動脈硬化関連要因で調整後も、**echogenic plaque** 保有とともに歩行能力、機能的移動能力、転倒歴と関連がみられた。
3. 地域在住女性における骨折、動脈硬化進展予防に向けた保健指導指針として、今後、骨密度で判定した骨粗鬆症、骨粗鬆症性骨折既往がある者は、心血管病発症のリスクが高いと考えられるため、早い段階から動脈硬化スクリーニングを積極的に行う必要があることを示した。また、スクリーニング結果をもとに骨-血管連関を視野に入れた保健指導を行うこと、バランス感覚や歩行能力など運動機能の改善、転倒予防への介入の必要性を示した。

本研究は、骨-血管連関を視野に入れた保健指導指針の策定のための重要な知見を提供した。

以上の理由により、本研究は博士（看護学）の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※第	号	氏名	濱田 昌実
試験担当者	主査 名古屋大学教授 本田 育美 	名古屋大学教授 林 登志雄 	名古屋大学教授 玉腰 浩司 	
<p>(試験の結果の要旨)</p> <p>主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 本研究の看護学における意義について 2. 現行の骨粗鬆症及び動脈硬化予防に関する保健指導ガイド等で不十分である箇所と、本研究で追加できる保健指導指針について 3. 20年の前向きコホート研究の中で、果たした役割について 4. 20年間追跡したコホートを10年間2つのコホートとして解析した理由と解析方法について 5. 2006年追跡調査時、参加しなかった対象者の特徴について <p>以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、看護学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。</p>				